

祖父にささげる金メダル

安田 悠真

僕の祖父は、小さな巨人だ。体は小柄だが、心には強さと優しさを秘めている。祖父に会うと誰もが笑顔になるし、みんなの悩みを一瞬で解決してしまう。運動が苦手な僕に竹馬の乗り方を教えてくれたのも、逆上がりの練習に付き合ってくれたのも、みんなみんな祖父だった。僕の「できた」を、いつだって応援してくれた祖父。僕は祖父が大好きだ。

祖父の部屋には、器械体操のあん馬を乗りこなす、若かった頃の祖父の写真が飾られている。軽々とあん馬に乗る姿は、今にも写真から飛び出してくいそうさ。でも、この写真の奥には、優しい祖父からは想像もできないほどの苦しい経験が詰まっていた。

ある日、祖父の部屋で写真を見つめる僕に、祖母が打ち明けてくれた。祖父が器械体操の選手で、東京オリンピック出場を目標にしていたこと。ある日、練習中に腰を痛めて、体操を続けられなくなったこと。悔しさと悲しさで、何も手に付かなくなったこと。そして、運動の楽しさを伝えようと立ち上がり、体育教師になったこと。祖父にこんなに辛い経験があったなんて、僕は少しも知らなかった。心に浮かぶのは、いつもの温かい笑顔ばかりだ。僕はこの日、祖父の強さと優しさの意味を知った。そして、僕を支えてくれる祖父に、何かできないかと考えるようになった。

今年（ことし）はオリンピックが開催された。五十七年ぶりの東京での開催。祖父はどんな思いで試合を見ているだろう。僕は祖父の背中を思うと、胸が押しつぶされるような気がした。そして、男子体操チームが銀メダルを獲ったあの日。祖父はテレビで嬉しそうに観戦していた。まるで自分のことのように目を細めて喜ぶ祖父の姿を見ていた時、僕は何かにつき動かされるように、自分の部屋に駆けこんだ。どうしてもやりたいことがあったからだ。

次の日の朝、僕は祖父に金メダルを渡した。折り紙で作った、小さな小さなメダルだ。子どもっぽくて、祖父は恥ずかしがるかもしれない。そう思ったけれど、僕は心をこめて作った。祖父への感謝の気持ちも、どうしても伝えなかったのだ。手作りの金メダルを渡した時、祖父はしばらくだまっていた。やっぱり嫌だったかな。心配する僕に、祖父は目に涙をいっぱいためて、ありがとうと伝えてくれた。祖母が、涙もろいところは相変わらずね、と笑って祖父の背中をなでた。祖母も僕も泣きそうだった。三人で泣き笑いしながら、祖父の首にかかった金メダルを眺めた。大きな歓声も、表彰台もないけれど、とても幸せな、満ち足りた時間だった。

僕は祖父がとて誇らしい。祖父の孫に生まれたことも、祖父に運動の楽しさを教えてもらえたことも、それらの思い出全てが、心の中で輝いている。祖父は僕の太陽だ。これからも、祖父への感謝を胸に、毎日を元気に過ごしていこう。